研究発表題目「淡路島方言における音節融合と代償延長」要旨

（東京大学大学院人文社会系研究科 修士課程 2 年　中澤 光平）

近畿地方の諸方言では，「一膳」がイッツェン/’iQceN/，「御馳走」がゴッツォー/goQcoR/となるような変化，すなわち*/’icizeN/ > /’iQceN/，*/gocisoR/ > /goQcoR/があることが知られている。

近畿地方の方言の 1 つである淡路島方言でも，「御馳走」/goQco(R)/，「付き合い」/cuQkjai/，「面白い」/’omoQsjo’i/のような変化が観察される。「御馳走」/goQco(R)/は*/gociso(R)/の狭母音/i/の脱落と子音の同化*/cs/ > */cc/ = /Qc/，「付き合い」/cuQkjai/は*/cuki’ai/の/i/の渡り音化*/i/ > /j/，「面白い」/’omoQsjo’i/は*/’omosiro’i/の/r/の脱落を経て/i/の渡り音化*/i/ > /j/と，それぞれ異なる現象のように見えるが，2 音節 $\sigma_1\sigma_2$ が 1 音節 σ_3 に融合する点では共通する。このように，2 音節 $\sigma_1\sigma_2$ が 1 音節 σ_3 になることを本発表では音節融合と呼ぶ。

本発表では，発表者による淡路島での調査データを基に，淡路島方言における音節融合を扱い，その音韻論的条件や解釈を試みる。

データから導かれる，淡路島方言で音節融合が起こる条件(α)は以下のようになる。

$\sigma_1\sigma_2$（＝/$C_1S_1V_1C_2S_2V_2$(N, R, Q, i)/）（σ_1 は軽音節のみ，σ_2 は重音節も可能）の

(αi) C_2 が/’/，または C_1 と C_2 がともに coronal（/s/，/c/，/z/，/t/，/d/，/n/，/r/）である

(αii) V_2 が V_1 より狭くない

音節融合ではモーラを保存するため特殊拍/N/（撥音），/R/（引き音），/Q/（促音）が補われる。どれが補われるかは，C_1 の素性（/’/，無声音，有声阻害音，鼻音）と位置で決まる。

音節融合の形を**表**にまとめると次のようになる。

表　音節融合まとめ

位置＼C_1	/’/	/k, s, t, c/	/g, z, d, b, r/	/n, m/
語頭	/σ_3R/	/σ_3R/ ~ /Qσ_3/	/σ_3R/ ~ /Nσ_3/	/σ_3R/ ~ /Nσ_3/
非語頭		/Qσ_3/	/Qσ_3/ ~ /Nσ_3/	/Nσ_3/

/σ_3R/は「家」*/’i’e/ > /’eR/等，　/σ_3R/ ~ /Qσ_3/は「消える」*/ki’eru/ > /keRru/ ~ /Qkeru/等，/Qσ_3/ ~ /Nσ_3/は「麦わら」*/mugi’wara/ > /muQgjara/ ~ /muNgjara/等。なお，/σ_3R/ ~ /Qσ_3/等は揺れではなく地域による実現形の違いで，これは淡路島方言内部で，各地区がどのような音素配列を許容するかによる。例えば，由良地区では語頭の/N/および/Q/を許容するため，「見よる」/Nmjoru/，「塩」/Qsjo/，「来えへん」/QkeheN/（< */ki’eheN/）となる。他の地域では語頭の/Q/を許容せず「来えへん」は/keRheN/となる。非語頭では/N/か/Q/を σ_3 の前に補うため，語頭でも語中と同様の形を取るのが自然だが，*/#N/および*/#Q/が優位なため，モーラ保存を満たすべく代償延長として/R/が挿入されると言える。有声音の前の/Q/を許容する地域では「まるで」が/maQde/だが，許容しない地域では/maNde/となる。これも，*DD（有声二重子音禁止）が優位か，DEP（基底外の音素挿入禁止）が優位かという制約の順位で説明可能である。

「御馳走」/goQco(R)/のように，C_1 と C_2 が coronal の融合では σ_3 が口蓋化するかは σ_2 のみで決まるが，C_2 が/r/の場合「面白い」/’omoQsjo(’)i/のように，C_2 が/’/の場合に準じる。一方で C_2 が/r/の融合は C_1 が coronal に限るなど，/r/は/’/と coronal の中間的な振舞いを示す。これも，coronal の同化など規則の順序では矛盾が生じ，最適性理論で初めて説明可能である。